

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520250
 研究課題名 (和文) 保守革命論の「前期」「後期」における
 ドイツ語詩人・作家の「理想的国民」像
 研究課題名 (英文) The respective images of an ideal citizen by a German poet and an author
 during the former and latter periods of the conservative
 revolution.
 研究代表者
 青地 伯水 (AOJI HAKUSUI)
 京都府立大学・文学部・准教授
 研究者番号：10264748

研究成果の概要 (和文)：多民族が共生する中世の神聖ローマ帝国にまで時代を遡行する「前期」保守革命論を代表するホフマンスタールは、政治的影響力を発揮できず、現代からすればほとんど無意味に見えるかもしれない。また、「後期」に属するトーマス・マンの時代状況に応じてドイツ社会主義から民主主義へ変貌する保守革命は、思想的には無節操に見えるかもしれない。しかし二人の「保守革命」という語にこめられた理想的国民像は、多民族の共生と民主主義という形で現代ヨーロッパの理想的国民像のなかにいきている。

研究成果の概要 (英文)：The conservative revolution in the former period represented by Hofmannsthal, who considered the Holy Roman Empire an ideal multiracial society, seems to have had no political influence at that time and may have no meaning now. The concept proposed by Thomas Mann in the latter period, that society should change from German socialism into a democracy according to the circumstances of the time, also might appear unprincipled. That notwithstanding, the images of an ideal citizen exemplified in the term “conservative revolution,” which both authors used, are still alive in the concept of multiracial nations and democracy in modern-day European nations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学、保守革命

1. 研究開始当初の背景

1920年代の「保守革命論」は研究史上、ナチ運動の前段階や源流と位置づけられるこ

とが多かった。しかしナチズムの全体像を問い直す1980年代の「歴史家論争」により、保守革命論も再検証が進み、保守革命論の独

自性を明らかにする研究が多数登場した。特に注目を集めたのは保守革命論における「理想的国民」像の理解である。このテーマに取り組んだ Stefan Breuer の<Anatomie der Konservativen Revolution> は保守革命論を「新しい国民主義」と定義しつつ、「理想的国民」の探求こそが、保守革命論の最大の課題であったと論じた。以後、ドイツ語文学・文化の研究において、詩人・作家の保守革命論と、その言説における「理想的国民」像の研究に関心が向けられることとなった。本研究もこの流れのなかに位置している。

2. 研究の目的

ドイツ語詩人・作家であるフーゴー・フォン・ホフマンスタールとトーマス・マンとを中心に、保守革命論における「理想的国民」像を解明する。

3. 研究の方法

保守革命論には、石田勇治が「帝国の幻影——神聖ローマ帝国からナチズムへ」で指摘するように、およそ 1927 年ごろを境として前期と後期がある。このうち前期の特徴は、国家論を欠いた、ユートピア主義的な「理想的国民」像が多く論じられたという点にある。そこで、この二分法を用いて、それぞれの代表であるホフマンスタールとトーマス・マンの保守革命を分析する。

4. 研究成果

保守革命という語は、周知のように多様な人物の思想と行動にたいして用いられる。すなわちビスマルクのドイツ帝国における政治的实践が保守革命であるとか、ニーチェこそが保守革命の祖であるとか、はたまたナチスの政権奪取が保守革命であるとか、という言いかたがなされてきた。しかし、本書で取り扱う「ドイツ保守革命」とは、いわゆるヴァイマル期ドイツ——亡命したトーマス・マンの場合はナチ時代も含めて——における、「国民社会主義」(ナチス)とは一線を画する、保守思想の総称である。また研究は思想的研究であって、たとえばパーペンのような政治家による政治的实践を対象とするものではなく、あくまでも文学者・思想家の著述にもとづく、文献学的研究である。

しかし時代をヴァイマル期に限定しても、なお個々の思想は個性的で多様を極めており、保守革命の全体像は安直な定義を許すものではない。また、保守革命の多様性は、国内政治の状況変化にのみ依拠するのではなく、ドイツ・オーストリアの地政学的条件にも依存している。すなわちドイツの北東には、一九一七年の革命により社会主義化したロシアであるソビエト連邦があり、ソ連型の社会主義に対する脅威がドイツ国内の保守勢

力のなかにもあった。

その一方、ドイツの西には宿敵フランスが位置していた。一九一九年六月、第一次世界大戦の戦後処理であるヴェルサイユ講和条約が連合国側とのあいだに結ばれたが、ドイツは人民や領土をフランスに奪われ、多額の賠償金を科せられた。その結果、天文学的数字となるインフレーションが出来し、ドイツ経済が混乱に陥ったことは周知のとおりである。そして政治的にも連合国側から、議会制民主主義を押しつけられ、百家争鳴のあまり弱体で不安定なヴァイマルの政治体制が、戦後ドイツ国内の混乱を深めていた。

そこでドイツ国内の保守勢力は、フランスに対するルサンチマンから議会制民主主義を拒絶し、彼らの新たな体制の模索のなかで、ソ連型の社会主義とは異なる第三の道としての「ドイツ的社会主義」を唱道する。「保守革命」発言初期のトーマス・マンがこの典型といえよう。

「保守革命」性を論じることは、本論における課題であるが、ここでは重要なファクターであったテクノロジーの問題をみてみよう。このファクターは、「ドイツ的社会主義」や保守革命とナチスとのあいだに一線を画する指標になりえないが、テクノロジーの問題は保守革命の多様さを生み出すひとつの原因である。

ブローイアーの『保守革命の解剖学』によると、たとえば、保守革命論者のひとりに数えられるレオポルト・ツィークラーは、次々と導入されるエネルギーによって人間が労働過程から排除される危険性を指摘している。そのうえ彼はすでに一九三〇年に、核エネルギーによって地上における恐ろしいカタストロフを予見するばかりか、この破壊的エネルギーによる地球の存亡をも視野に入れている。それでも彼は過度の技術発展に警鐘を鳴らしながらも、テクノロジーなしには現代社会の存立は不可能であると見なしていた。

それに対して保守革命論者のなかでも反文明的な立場をとるツェーラーやシュターペルは、自然への回帰を唱え、農業を中心とした生産への退行の可能性をも模索した。またニーキシュのように産業を廃し、原始生活への逆戻りを唱えるものまであった。たしかにテクノロジーの進歩はとどまることがない。しかし、シュペングラーは、テクノロジーが人間性や自然にたいして破壊的效果を持っていることを認めながらも、テクノロジーの開発のなかに人間とその創造性との自由を見出す。

人間性の伸長の表現であると肯定的にとらえることもできるテクノロジーは、人間生活の様々な局面にかかわってくる。その結果、もはや政治的に中立であり得ないという立場を、カール・シュミットやエルンスト・ユ

ンガーはとる。なぜなら第一次世界大戦において、はじめて戦場に戦車、飛行機、毒ガスが登場し、国家にとってこれらテクノロジーにもとづく兵器を軍備に導入することは、不可欠になったからである。テクノロジーの発展は、国家にとって非常に関心の高い問題となつてゆく。これにより政治から自由なテクノロジーの発展が困難になったことは、間違いない。それでもとくに E・ユンガーはテクノロジーの発展に関してはかなり楽天的な見解を示しており、彼はその未来に予定調和的な像を見出し、文明を制御するべきではないと唱えている。

さて、ハイデッガーが、一九三三年四月から一〇か月間フライブルク大学の学長を務め、ナチズムを支持する講義や講演をおこなったことはつとに知られている。ハイデッガーは、「テクノロジーがそれ自体の意志を持つ自律的力」と見なした点においては、カール・シュミットや E・ユンガーと見解をともにしている。そこでハイデッガーは、ナチスにテクノロジーと文化とを結合させる使命を託したのであった。ところが彼は一年とたたないうちに、「ヒトラー主義は「存在」に対する西欧的支配という長期的プロセスを継続」させる側に与していることに気づき、ナチスと決別し、政治的第一線から身を引いてしまう。つまり、ハイデッガーは、ヒトラー主義が「存在」の見直しを迫るよりも、技術の発展の波に流されている、と解釈したのである。

ハイデッガーにとっては、ハーフの記述に従えば、アメリカを代表とする西欧とソ連を代表とする東欧との精神的頹落ぶりは、すでに救済の対象となる限界を超えており、救済可能性のある国民はその中間に位置するドイツだけだった。ところが反近代主義者であるハイデッガーは、当初はナチズムにテクノロジーを用いた西欧文明の回復を期待していたが、その過程での失望から、テクノロジーを否定する見解を再び支持することとなった。ハイデッガーは、「真の現存在の回復は技術的進歩を停止することを意味しているが、ナチズムは明らかに反技術的なプログラムを追求してはいなかった」と考える。結局のところハイデッガーは、「反近代主義者による抗議という自己の立場を近代テクノロジーと和解させることはできなかった」のであった。

テクノロジー問題は、ハイデッガーがナチズムと決裂した原因のひとつであるが、彼のテクノロジーへの態度だけで、彼が保守革命論者と呼ばれているわけではない。むしろ保守革命論者のテクノロジーへの態度は、すでにみたように多様である。それよりもハイデッガーを保守革命論者に近づけているのは、全体が一であり、一が全体であることを目指

す全体主義的な社会像を支持している姿勢である。この全一の魅力が、ホフマンスタールら多くの保守革命論者と同様にハイデッガーをも魅了した。すなわち、この全体主義的傾向こそは、晩年のトーマス・マンら一部の例外を除けば保守革命のメルクマールである。

ブロイアーは全体主義的傾向をもつ「ドイツ的社会主義」の一例としてフリードリヒ・ゲオルク・ユンガーをあげている¹²⁾。ユンガーの説では、ドイツが第一次大戦で敗北を喫した原因は、単に不十分な政治体制のみにあるのではなく、総動員体制をしくことができない経済・社会体制にあったという。したがって国家を刷新するさいには、政治的自由を排除し、権威ある政府を創設するだけでは充分ではなく、自由主義経済体制と敵対し、経済を国家に従属させることが重要であるという。私有財産は認めるにしても、それが国家の障害にならないことが前提であり、国家はあらゆる領域を厳しく監視するとともに、福祉事業をおこなうことが重要であるという。

つまりそこで築かれるべき体制は、国民総動員の可能な体制であり、必然的にそこには政治的自由は存在しない。政治的自由のないところには、経済の自由はありえない。そして国家による経済への統制は、生産レベルだけではなく、個人の財産にまでおよぶことになる。個人の財産は、国家経済に影響力を発揮できない規模に限定される。その反面、国家は、個人が自由を放棄することを、社会政策の一環として福祉事業をおこなうことで補償する。

F・G・ユンガーの「ドイツ的社會主義」の骨子をみれば、ナチスドイツ政権掌握後の体制といくつかの類似点を有する。そして、その後絶縁することになったとはいえ一時的にはあるがナチスに接近した、ハイデッガーやゾンバルトも「ドイツ社会主義」への思想的類似性から、われわれが保守革命論者として論じることが可能であろう。

さて、われわれの共同研究である「保守革命論の「前期」「後期」におけるドイツ語詩人・作家の「理想的国民」像」においては、二九年の世界恐慌を経て、三〇年九月の国政選挙ののち、議会でナチスが躍進をとげた一九二〇年代の終わりに保守革命に関わる言説において、重大な転機があるという作業仮説のもとに議論を展開した。

具体的に言えば、二七年初頭、ホフマンスタールはミュンヘン大学で『国民の精神空間としての著作』講演を行ない、「保守革命」という語を用いている。ホフマンスタールのおくった青春時代に、人間理性はルネサンスや宗教改革以前に存在した神の統べる全体性を完膚無きまでに崩壊させ、支配力をいっ

そう強め、形而上世界を無に帰した。その結果、ヨーロッパ文化は土台を支える根底を失い、秩序をもはや見出せなくなり、分裂衰退へと向かっていった。ホフマンスタールはわずか一八歳になるやならずやで、ヨーロッパ文化衰退の契機をフランス革命ではなく、一六世紀末に見出し、その時代に照準をあわせて創作を重ねた。彼はその後『チャンドス卿の手紙』において、形而上世界の残滓が、二〇世紀のモデルネの世界に「あたかも裏口を通ってのように」到来を告げ、反動を形成する様を描く。その反動は、神秘的な様相を帯び、沈黙の言語となって、すべての事物との交流を通じて、失われた全体性の回復を言語においてめざしていた。

『チャンドス卿の手紙』が描いた過程であるヒエログリフの崩壊に始まり、神なき世界の苦悩、沈黙の言語による全体性の回復志向こそが、『著作』講演に語られた「あの一六世紀の精神革命に対するひとつの内的反動として始まった」過程である。ホフマンスタールは『ティツィアーノの死』に始まり、『チャンドス卿の手紙』をへて、『著作』講演にいたるまで一貫して、人間理性の展開に対抗する、一六世紀への反動に始まる非合理的過程を描き続けた。すなわち、ホフマンスタールの作品系譜こそが、『著作』講演において「保守革命」と呼んだ過程にほかならないのである。ホフマンスタールは、この「保守革命」過程のうちに著作によって国民の精神空間のなかに社会の全体性が達成されることを夢み、目指したのであった。

一方、第二次大戦中にもマンは「保守革命」という言葉をもちいている。それは、一九四二年にワシントンでおこなわれた『ヨセフとその兄弟たち』と題された講演の、削除されたタイプ原稿のなかに見られる。そこでマンは、「フマニテートの理念のなかに」「伝統と革命」が「つきることのない魅力をたたえて混ざり合っている」と述べたあと、「“保守革命”というスローガンはファシズムによって力づくで奪いとられてしまった」とつづける。しかしながら、マンはいう、まさにこの「保守革命」こそ、「ファシズムの敵対者」である当時のアメリカ副大統領ヘンリー・A・ウォーレスがおこなった講演『自由世界勝利の価値』の「精神と意味」をあらわすのもっともふさわしい。ウォーレスの講演は、「人間的なもののなかで伝統と革命がひとつになっていること」の、「保守的な意志と革命的な意志はひとつの同じもの、つまり善良な意志なのだ」ということを示す「もっともすばらしい例」なのだということである。「フマニテート理念」のなかに「伝統と革命」が混ざり合っており、それこそが真の意味での「保守革命」である。そしてその名は、題

名からして明らかにファシズムに勝利することの必要性を説くウォーレスの講演にこそふさわしい——ここにわれわれは、『尺度と価値』創刊号で打ち出された「保守革命」が、大戦のさなかの対ファシズム戦略において確たる地位を占めているのをみとめることができるだろう。

一九四五年にもマンは「保守革命」に言及する。ドイツ降伏直後の五月二十九日、ワシントンでおこなわれた有名な講演『ドイツとドイツ人』のなかでのことである。そのなかでかれはルターをとりあげ——ここでマンのルター受容に触れるゆとりはないが、この講演におけるかれのルター観は、否定的な評価に傾きつつもかなりアンビバレントなものということができる——ルターは、「解放的であると同時に反動的」であるという意味で「保守革命家」なのだという(XI. 1133)。これはマンのアンビバレントなルター観を引きずった見解といえるが、ことはそれだけにはとどまらない。かれはこうつづけるのである。

かれはじっさい、教会を再建しただけではありません。かれはキリスト教を救ったのです。(・・・)ルターの革命が、キリスト教を存続させたのです——ちょうどニュー・ディール政策が資本主義的経済形態を存続させようとしているのとほぼ同じように(・・・)(XI. 1133)。

「ルターの革命がキリスト教を存続させた」——「存続させる」(konservieren)ものとしての「革命」。これこそまさに、亡命後のマンが追求してきた「保守革命」の核心ということができる。しかもそれは、ナチズムに勝利したあともその価値を減ずることなく、ニュー・ディール政策にたとえられることによってきわめて肯定的に評価されていると同時に、現実的かつ具体的な政策の次元にまでその適応範囲を広げているのである——ここでわれわれは、マンがさきほど「保守革命」という言葉はその講演にこそふさわしいと評したウォーレスが、農務長官としてニュー・ディール政策遂行にふかくかかわった人物であったということを想起しておいても無駄ではなからう。

第一次大戦後の新たなドイツの模索過程で浮かびあがってきた「保守革命」。ナチス政権獲得から第二次大戦中はナチズムと戦うさいの基軸としての「保守革命」。そしてヨーロッパにおける戦争終結後「保守革命」は、ニュー・ディール政策と結び合わされることによってその射程を大きく拡張し、国家的政策の根幹部分の特徴づけるのにもちいられることになる。このように「保守革命」というものはマンにとってけっして一過性

の、いわば流行現象のようなものではなく、第一次大戦終結からナチズム以降の時代まで絶えず念頭に浮かびあがっていたものであり、一九三〇年前後のプレナチズムの時代をのぞいて、そのときどきの政治的・思想的・社会的状況に合わせてその姿を微妙に変容させつつ、つねに積極的かつ建設的な意味をになうものであったといえることができる。

『著作』講演の一年半後に、世界大恐慌を知らずに亡くなるホフマンスタールが用いた「保守革命」は、理念的・ユートピア的性質を帯びている。自らを高次の全体性の一部と見なすことによって、充溢した生を自己のうちに感じ取ることによって成功していた中世社会の人々に、ホフマンスタールは人類の理想的国民像を見出していた。それゆえローマ・カトリック教会の支配する中世世界の新たな形での復興こそが、彼の「保守革命」の目的地であった。

一方、ホフマンスタールの死後も数度、「保守革命」という語を用いた言説を残しているトーマス・マンのばあい、度重なる使用のなかで「保守革命」という語に明らかに異なる価値を担わせている。つまり端的に言えば、マンは、戦勝国フランスの政治体制を超越する反民主主義的な「ドイツ的社会主義」を実現する「保守革命」から、ナチスドイツの似非革命に対抗する民主主義的な「保守革命」へとこの語の持つ価値を変換している。マンの最終的な理想的国民像は、民主主義のなかにある。

ホフマンスタールとトーマス・マンの生年は、一八七四年と七五年の一年違いであるが、五五歳で亡くなったホフマンスタールと八〇歳の長命を授かったマンとでは、当然経験した時代も異なるわけで、上述のように性質の異なる「保守革命」を呈示している。この二人がとなえた「保守革命」は、当時のドイツの政治思想・政治的实践を映し出す二つの鏡であった。多民族が共生する中世の神聖ローマ帝国にまで時代を遡行するホフマンスタールの保守革命は、政治的影響力を発揮できず、現代からすればほとんど無意味に見えるかもしれない。しかし彼の唱えた理念的な多民族の共生は、その後の時代においても、現代においても意義のあるものであった。また、トーマス・マンの時代状況に鑑みて変貌する保守革命は、思想的には無節操に見えるかもしれないが、結果的に現実的な像を呈示できた。いま彼らが二一世紀の民主的で多数の国家がよりそうヨーロッパをまのあたりにすれば、そこにいかなる感慨をいだくであろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①青地伯水、チャンドス卿と保守革命の射程——変容せざるホフマンスタール、『希土』(希土同人社)、査読なし、34号、2009、153-168

②青地伯水、保守革命論者批判としての「保守革命」、『AZUR』(京都府立大学ドイツ文学会)、査読なし、1号、2009、1-13

③青地伯水、ホフマンスタールの<保守革命>と神聖ローマ帝国幻想——ランツベルクの『中世世界と私たち』をてがかりに、日本独文学会研究叢書056 青地伯水編『保守革命をめぐって——ナチとの断絶・ナチへの回収』、査読なし、2008、14-28

④青地伯水、オーストリア帝国幻想と生の哲学——ホフマンスタールの第一次世界大戦、京都府立大学学術報告 人文・社会、査読なし、60号、2008、1-12

〔学会発表〕(計3件)

①青地伯水、友田和秀他、シンポジウム「保守革命」をめぐって——ナチとの断絶、ナチへの回収、日本独文学会、2007年10月7日、大阪市立大学

②青地伯水、ホフマンスタールの第一次世界大戦——その社会的・文化的視点、日本グリンパルツァー協会、2007年12月9日、キャンパスプラザ京都

③青地伯水、フローレンス・クリスティアン・ラングを介してみるホフマンスタールの保守革命、日本独文学会、2008年10月12日、岡山大学

〔図書〕(計1件)

青地伯水、友田和秀他、松籟社、ドイツ保守革命——ホフマンスタール／トーマス・マン／ハイデッガー／ゾンバルトの場合、2010、9-106

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青地 伯水 (AOJI HAKUSUI)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：10264748

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

友田 和秀 (TOMODA KAZUHIDE)

研究者番号 : 10207631